

第5節 中学校 外国語科

1 基本的な考え方

(1) 外国語科における学び合う活動について

ア 学び合う活動とコミュニケーション能力の育成

グローバル人材育成のため、小・中・高を通じて英語によるコミュニケーション能力を養うことが求められている中、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告（文部科学省）」（2014）（以下「報告」という。）では、中学校段階の指導としては、「身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合う学習を重視する。」と、具体的な改善の方向性が示された。江利川（2012）は、「学習者同士がお互いに学び合い、励まし合いながら、高い目標に向かって切磋琢磨し合う協同学習こそが、英語によるコミュニケーション能力の向上に不可欠である」と、英語学習における「協同学習」の重要性を指摘している。

なお、「協働的・双方向的な学び」の定義については、総論で述べた通りであるが、英語科における「協働的・双方向的な学び」の考え方として、本節では、江利川の言う「協同学習」の概念を用いることとする。

イ 現状と課題

昨年度の当研究所のプロジェクト研究1では、児童生徒の学び合いとして、グループ学習、ペア学習を授業の中に意識的に取り入れた授業が、児童生徒の学習意欲を高めるのに有効であることを検証した。『中学校学習指導要領（外国語）』（2008）（以下「指導要領」という。）の中でも、指導計画の作成に当たっては、「ペアワーク、グループワークなどの学習形態を適宜工夫すること。」と配慮事項が示されている。しかしながら、「平成25年度公立中学校・中等教育学校（前期課程）における英語教育実施状況調査（文部科学省）」の結果をみると、授業においてペアワークやグループワーク等で生徒が英語で言語活動をする場面を半分以上設定しているのは、1年生52%、2年生47%、3年生43%となっており、「コミュニケーション能力の育成を意識した取組が不十分な学校もある」（報告）ようである。

(2) 研究のねらい

ア 研究目的

英語科の授業に「協働的・双方向的な学び」を取り入れる際、他の教科とは違い、コミュニケーションの前提となる英語を習得するための、一定の訓練が必要である点に留意しなければならない。ペアワークやグループワークを学習途上の英語の知識を用いて成立させるには、工夫が必要である。江利川（2012）は、「発音や新出の文法事項の指導などは教師主導の一斉授業の方が効果的な場合もあるでしょう。しかし、習った事項を実際の英語表現に応用する活動では、ペアやグループによる協同学習が威力を発揮します。仲間との実際のコミュニケーションを通じて英語の理解や運用力を高めます。」と、一斉授業と協同学習を組み合わせる必要性に言及している。

本研究では、音読と内容読解に焦点を当てたペアワークやグループワークを取り入れた授業を行い、生徒の変容について検証するとともに、効果的な授業モデル及びワークシートの在り方について研究した。

イ 研究仮説

本研究では、次のように研究仮説を設定した。

(7) 音読指導について

教科書の英文の音読練習をペアで行うことにより、互いに双方の発音、イントネーション等を確認し合えるため、より正確な発音を追求することができるのではないか、また、英文に適切なジェスチャーをペアで相談しながら付けることにより、英文の意味を深く理解することができるのではないかと考えた。

【仮説①】

ペアによる音読練習を取り入れることにより、教科書の英文の意味を理解しながら英語の発音することに慣れ、意欲的に英語を発するようになる。

(イ) 内容読解指導について

日本語を介した英文読解指導によらない読解のためのワークシートを工夫し、グループ内で話し合いながら必要な情報を読み取る活動を通して、生徒は主体的に考え、能動的に話し合い教え合うことができるのではないかと考えた。その結果、生徒一人一人の英文の内容理解が深まり意欲的に英語学習に取り組むようになるのではないかと考えた。

【仮説②】

グループで英文の内容について話し合いながら完成させていくようなワークシートを工夫すれば、生徒は主体的に考え、能動的に話し合いながら意欲的に学習に取り組むようになる。

(3) 研究の進め方

ア 研究期間

平成26年5月～12月

イ 研究対象

実施校：河合町立河合第一中学校

対象生徒：第2学年A組生徒23名、同B組生徒24名 計47名

ウ 研究方法

- 質問紙調査実施（5月、7月、12月）、及び分析と考察
- ペアワーク、グループワークを取り入れた授業を展開する上で効果的なワークシート作成、及び授業実践（2学期）
- 授業モデル作成

2 「協働的・双方向的な学び」を取り入れた授業実践

(1) 実践前の対象生徒の実態

調査校の生徒は、校区内に小学校が一つだけで、これまでほぼ同じメンバーで学校生活を送ってきたこともあり、男女の隔てなく声を掛け合い交流する姿が見られる一方で、少人数の活動では活発だがクラス全体で活動内容をシェアする場面になると、尻込みしてしまい自分から進んで意見を発信することに消極的である場面が見られた。自分の意見に自信がもてず失敗を恐れているように思われ、それぞれが英語の発音や音読をする際にも声を出そうとしない生徒が数人見られた。また、教員主導型の授業スタイルが中心で、プリントドリルなど機械的な作業に終始する

ことが多いせいか、英語をコミュニケーションを図る手段としてではなく、単にテストに必要な知識として捉えているようにも思われた。

(2) 実践の内容

5月に質問紙調査を実施した結果、47人中21人が「英語の勉強は好きだ」の設問に対して肯定的でない回答をしており、英語学習に対して、あまり前向きなモチベーションをもっているとは言えない状況であった。研究員は当該学年を1年次から指導してきているが、入学当時はいきいきと英語を発音し、まさに学習することを楽しんでいるように見えた、と振り返る。しかし、学習内容の難易度が上がるにつれ、文法指導についてはワークブックなどを使った機械的な反復練習が多くなり、教科書本文の読解指導については単なる訳読中心の講義形式になっていき、言語活動を十分行えない状況が続いたようだ。こういう指導が原因で、生徒の英語学習への興味関心は薄れていったのではないかと推測される。そこで本研究では、ペアワークやグループワークを通して協働的・双方向的な活動を充実させることで、生徒が英語学習の楽しみを知り、英語のコミュニケーション能力を伸ばしていけるのではないかと考え、以下の取組を行った。

ア 「協働的・双方向的な学び」を充実させるための工夫

(7) ペア、グループ編成上の工夫

ペアの編成に当たっては、各クラスの生活班の班長に指示し、英語が得意な生徒と苦手な生徒でペアを作らせた。英語の得意、不得意については、テストの点数のみで判断するのではなく英語学習に取り組む意欲も考慮して自己申告させ、また、班の中での自分の役割も考慮に入れて編成するよう指導した。仲のよい友達とペアを組みたがる生徒も中にはいたが、以下の杉江(2011)の言葉に触れながら、英語の力を伸ばすことを考えてペアをつくるように指示した。

「活動の当初は互いのことを一定理解していますから、話し合いもスムーズにいくように見えます。しかしその過程ではずいぶん気を遣い合っています。課題を効果的に達成するにはそのことが次第に邪魔になっていきます。むしろ、さほどの知り合いではない者同士で作った集団の場合、課題解決のための関係で結ばれた集団が次第に形成されていき、集団としての成果はこちらの方が優れていくのです。」

またグループの編成については、2つのペアを合体させ、4人のグループを形成した。西林・高椋(2010)が、以下のように述べているのを参考にした。

「グループは4人が最適。6人以上は多すぎます。」「4人グループは2つのペアと考えられるので、比較的簡単にメンバーを変えることができます。パートナーを変える要領で座席を移動させ、新しいペアを2つ合わせてグループにすればメンバーを変えることができます。」

1学期には6人グループを編成したこともあったが、fast learnerの生徒1人が課題に取り組み、その他の生徒はfast learnerの生徒が完成させた課題を写すだけといった状況が散見された。6人では人数が多すぎ、生徒一人一人の役割や責任感が薄まってしまうようだ。また、6人だとうまく発言できない生徒も出てきて、話し合いや活動がスムーズに進まない場面もあった。

(4) 音読指導の工夫

安木(2010)は、音読指導の目的について、「単語認知の自動化」「学習した語彙、表現、文法の内在化」「口答で伝達する力の育成」「内容理解の補助」を挙げている。また、山岡(2014)は、言語活動の条件として、「生徒がクリエイティブな発信をすること」「言語的な狙いがあり、活動をすることで学習や気づきがあること」が必要であるとしている。そこで、音読活動から言語活動につなげることを意識し、以下の手順でペアワークによる音読指導を行った。音読練習に

用いる言語材料としては、主に各レッスンのDialogを取り上げた。

- ① ペアで発音を確認する。
- ② 各文に2つ以上のジェスチャーを付け、音読練習をする。
- ③ ペアで、対話の内容に合うように一文を付け加え（以下「プラスワンセンテンス活動」という。）、ジェスチャーを付けて教員の前で暗唱する。

①についてはワークシート（別添資料1）を作成し、特に注意する音を指摘し、意識的に発音させた。

②については、北原(2010)が、ジェスチャーリーディングから期待される効果として、「・理解・表現に日本語を介さない／・英語の語順が自然に身につく／・たとえ忘れてもジェスチャーがことばを引っ張り出す／・意識が内容語に向かうため、機能語の使い方が潜在化（無意識化・自動化）される。自動化できるようになると発話がスムーズになる」と挙げているのを参考に、取り入れた。

③については、生徒がDialogの内容を理解し、登場人物の特徴や場面設定などを考慮した上で、その文脈を崩さずにもう一文付け加えるという活動である。教科書本文を単なる対話文とせず、そこにいる人物がどういう背景で発言、行動しているのかを読み取らせ、考えさせるねらいがある。その際、互いの意見を聞き、認め合い、その上で既習事項を駆使して表現することになる。この活動が「生徒がクリエイティブな発信」をし、「言語的な狙いがあり、活動することで学習や気づき」を得られる言語活動となると考えた。

なお、ワークシート下段にく長文Challenge>という欄を設け、本文との関連を意識して作成した例文及び設問を載せた。英文読解に慣れることを期待したものである。

(ウ) 内容読解指導の工夫

これまでの授業では、文構造を押さえることを中心に据え、英文を和訳する方法を取ることが多かったが、生徒は一文一文を和訳することにとらわれすぎて、英文全体の内容理解に結び付いていきにくいようであった。また、英文が長くなればなるほど、理解が難しくなり、取り組む意欲を下げてしまう生徒もいた。江利川(2012)は、協同学習における教材やタスクについて、「一人の力では到達できないような高いレベルの課題を設定し、目標達成のためのコミュニケーション力と、助け合いによる人間関係力を必要とするような課題設定が大切」と述べている。そこで本研究では、グループで話し合いながら取り組めるようなワークシートを開発し、英文全体を通した内容理解を促すことにした。ワークシート作成に当たって留意した点は次の4点である。

- ① 文法事項の確認に終始せず、英文全体の内容を読解させることに焦点を当てる。
- ② 英文の展開を意識できるように、フローチャート形式で作成する。
- ③ 英文の内容に基づいてはいるが、既習の語彙全般を活用して答えられるようにする。
- ④ 活動の最後には、グループによるスピーキング活動につなげられるようにする。

ワークシートについては、別添資料2-1、2-2、4-1、4-2、4-3に例を示した。部分的に精読を基にした問題や推測問題も含めたが、英文の精読よりもスキミングに重点を置き作成した。ワークシートに自分の意見を書き、それをグループの中でシェアし、最後にはグループ員の意見をまとめ、グループ員全員が役割分担をしてプレゼンテーションを行うよう指導した。

イ 実践①

使用教材：NEW HORIZON English Course 2（東京書籍）

(7) 指導計画

| 時 | 学習内容 | 学習活動 |
|-----------|---|--|
| 1 | have toの導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 10 mins Talking ・ 教員によるhave toのオーラルイントロダクションを聞く ・ have toの問題演習 (ワークブック使用) ・ have toを使った文の音読練習 (個人練習) ・ 「自分ん家ルールを紹介！」 (発展) |
| 2 | have toを使った文の音読練習 Starting Outの導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 4 mins Talking ・ ペアでhave toを使った文の音読練習 ・ Starting Out 内容読解 ・ Starting Out ペア音読 |
| 3 | willの導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 4 mins Talking ・ 教員によるwillのオーラルイントロダクションを聞く ・ willの問題演習 (ワークブック使用) ・ willを使った文の音読練習 (個人練習) ・ 「今宵の私の予定」 (発展) |
| 4 (本時) | willを使った文の音読練習 Dialog導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 4 mins Talking ・ ペアでwillを使った文の音読練習 ・ Dialog 内容読解 ・ Dialog ペアで音読練習 (発音練習、ジェスチャー付加及びプラスワンセンテンス活動) (別添資料1) |
| 5 | mustの導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ 教員によるmustのオーラルイントロダクションを聞く ・ mustの問題演習 (ワークブック使用) ・ mustを使った文の音読練習 (個人練習) ・ 「あなたも先生！」 (発展) |
| 6 | mustを使った文の音読練習 Reading for Communication 1 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 4 mins Talking ・ ペアでwillを使った文の音読練習 ・ 教員によるReading for Communication 1 のオーラルイントロダクションを聞く ・ ワークシート (別添資料2-1) を用いて、Reading for Communication 1 内容 読解 (個人→ペア→グループ活動) |
| 7 | Reading for Communication 1 内容読解グループワーク Reading for Communication 2 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ ワークシートを用いて、Reading for Communication 1 内容 読解 (グループ活動) ・ 教員によるReading for Communication 2 のオーラルイントロダクションを聞く ・ ワークシートを用いて、Reading for Communication 2 内容 読解 (個人) |

| | | |
|---|---|---|
| 8 | Reading for Communication 1 音読活動 Reading for Communication 2 内容読解グループワーク | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ Reading for Communication 1 グループ音読練習 ・ ワークシート（別添資料2-2）を用いて、Reading for Communication 2 内容読解（ペア→グループ活動） |
| 9 | Reading for Communication 2 グループ発表 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ ワークシート（別添資料2-2）を用いて、Reading for Communication 2 グループ発表 ・ Unit 4 まとめ |

(イ) 単元のねらい

教材は、日本人中学生さくらがアメリカでホームステイをするというストーリーである。Dialogのホストマザーとさくらの会話の中で、アメリカでの生活の様子が紹介されている。内容読解を目的としたReading for Communicationでは、ホームステイ中の悩みを相談する内容となっている。単元を通して、日本とアメリカの生活習慣の違いを理解させることをねらいとした。



図1 ペアワークの様子

「協働的・双方向的な学び」の視点から、本研究の取組である音読と内容読解において、ペア及びグループでの活動を取り入れた。

(ウ) 本時の展開

| 学習内容と指示 | 生徒の活動と反応 | 留意点、手立て |
|--|--|---------------------------------------|
| 4 mins Talking | ペアでマシンガンQ&Aに取り組む。 | 教員は机間指導しながら生徒を支援する。 |
| 辞書読み | 各自で自由に辞書の中の1ページを選び、そのページから自分の知らなかった情報をまとめる。その後、グループで情報をシェアし、グループ毎に得た情報をまとめる。 | |
| “will”パンチゲーム ～ will play baseball tomorrow. | 教員が指示する主語に“will play baseball tomorrow”をつけて即座に口頭で答える。 | 前時に導入した新文法の口頭ドリルである。全員の素早い反応を促す。 |
| willを使った文の音読練習 | インタビュープリント（別添資料3）のTarget Dialogの音読をペアで取り組む。発音確認、ジェスチャー付け、暗唱練習をする。 | 机間指導の中で、生徒が交わす言葉やジェスチャーから理解度を測り、支援する。 |
| Unit 4 Dialog オーラルイントロダクション | Dialogに関する教員の話す英語を聞き、内容をつかむ。 | 黒板にキーワード等は書きながら導入していく。 |

| | | |
|-------------------------|---|---|
| Unit 4 Dialog 新出単語導入 | 新出単語をフラッシュカードを見ながら口頭で練習する。 | 新出単語をフラッシュカードを用いて提示し、定着を図る。 |
| Unit 4 Dialog 本文リスニング | 本文を2回聞く。 | デジタル教科書の本文音声を聞かせる。 |
| Unit 4 Dialog 本文字幕リスニング | デジタル教科書に出される字幕を見ながら英語を聞く。 | 音と文字をつなげるために、十分に音を聞かせた後で、文字を見せる。 |
| Unit 4 Dialog 本文読解 | 教科書を開き、黙読する。その後、教員から出される質問に対して、教科書の答えの部分に線を引く。 | 教科書の内容について、日本語で質問する。 |
| Unit 4 Dialog 本文ペア音読練習 | ペアで本文の発音を確認する。(別添資料1) "l"の発音に注意し、互いに発音を聞き合う。 英文にジェスチャーを付ける。 本文の流れに合わせて、一文を付け加え、会話練習を続ける。 | 別添資料1を用いて、ペアで音読練習をさせる。 "l"の発音に注意させ、ペアで発音を確認し合うよう、指示する。 英文にジェスチャーを付けさせ、内容理解の深化を図る。 ペアで内容に合うように一文を付け加えさせる。 |

ウ 実践②

使用教材：NEW HORIZON English Course 2 (東京書籍)

単元：Unit 5 A New Language Service

(7) 指導計画

| 時 | 学習内容 | 学習活動 |
|---|---|---|
| 1 | 接続詞ifの導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ 教員によるifのオーラルイントロダクションを聞く ・ have toの問題演習 (ワークブック使用) ・ have toを使った文の音読練習 (個人練習) |
| 2 | ifを使った文の音読練習 Starting Out新出単語導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ ペアでifを使った文の音読練習 ・ ifチェンゲーム (発展) ・ Starting Out 新出単語発音練習 (ペア) |
| 3 | Starting Out 内容読解 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ Starting Out内容読解 |
| 4 | "I think that～"、 "I'm sure that～"の導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ "I think that～"、"I'm sure that～"の使い方を知る。 ・ インタビュービンゴ ・ プラスワンセンテンスで相手を説得 (発展) |
| 5 | Starting Out ALT edition導入 ALT editionのTarget Dialog音読練習 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 3 mins Talking ・ Starting Out ALT editionを聞く。 ・ I thinkを使った文のペア音読練習 |

| | | |
|-----------|---|--|
| | Unit 5 本文音読練習 | ・Unit 5 Dialog 本文ペア音読練習 |
| 6 | 接続詞whenの導入 Reading for Communication 1 内容読解グループワーク | ・ 3 mins Talking ・ 教員によるwhenのオーラルイントロダクションを聞く ・ whenの問題演習（ワークブック使用） ・ ワークシート（別添資料4-1）を用いて、Reading for Communication 1 内容読解（グループ活動） |
| 7 | whenを使った文の音読練習 Reading for Communication 1 導入 Reading for Communication 1 内容読解グループワーク | ・ 3 mins Talking ・ ペアでwhenを使った文の音読練習及びチェンゲーム ・ 教員によるReading for Communication 1 のオーラルイントロダクションを聞く ・ ワークシート（別添資料4-2、4-3）で、Reading for Communication 1 の内容読解・音読練習（グループ活動） |
| 8 (本時) | 接続詞becauseの導入 Reading for Communication 2 導入 Reading for Communication 2 内容読解グループワーク | ・ 3 mins Talking ・ becauseの使い方を知り、口頭練習 ・ 教員によるReading for Communication 2 のオーラルイントロダクションを聞く ・ ワークシート（別添資料5-1）を用いて、Reading for Communication 2 内容読解（グループ活動） |
| 9 | becauseを使った文の音読練習 Reading for Communication 2 グループ発表 | ・ 3 mins Talking ・ ペアでbecauseを使った文の音読練習 ・ ワークシート（別添資料5-2、5-3）を用いてReading for Communication 2 グループ発表 |

(イ) 単元のねらい

外国人への言語サービスを扱った教材である。単元を通して、在日外国人に対してどのようなサポートが必要か考えさせた。また、必要な情報をスキャンさせ、本文全体の内容を理解することを第一義的な目的とした。ワークシートでは、本文の内容を順を追って理解するためのヒントとなる問いを提示した。また、本文から人物の気持ちを推測し、英文をつくらせる課題を設定し、課題に取り組む際、互いの意見の差異を知り、認め、指摘し合える楽しみをグループワークに期待した。



図2 グループワークの様子

(ウ) 本時の展開

| 学習内容と指示 | 生徒の活動と反応 | 留意点、評価、手立て |
|----------------|-------------------|------------------------|
| 4 mins Talking | ペアでマシンガンQ&Aに取り組む。 | 教員は机間指導しながら生徒たちの支援をする。 |

| | | |
|---|--|---|
| becauseの導入 | I (don't) like English because ~を使って口頭練習。 | becauseの使い方を提示し、口頭で練習させ、板書をノートに書かせる。 |
| Reading for Communication 2 オーラルイントロダクション | 教員によるReading for Communication 2 のオーラルイントロダクションを聞き、内容をつかむ。 | 黒板にキーワード等は書きながら導入していく。 |
| Reading for Communication 2 新出単語導入 | 新出単語をフラッシュカードを見ながら口頭で練習する。 | 新出単語をフラッシュカードを用いて提示し、定着を図る。その際、全員が顔を上げて、発音できているか確認する。 |
| Reading for Communication 2 本文リスニング | 本を閉じ、本文を2回聞く。その後、字幕を見ながら聞き、続いて教科書を見ながら聞く。 | デジタル教科書の本文音声を聞かせる。音と文字をつなげるために、十分に音を聞かせた後で、文字を見せる。 |
| Reading for Communication 2 内容読解グループワーク | 個人で本文を読み、ワークシート（別添資料4）を解答する。その後、ペア、グループと話し合う範囲を広げながら、内容について考える。その際、教科書の意見の根拠になる箇所には線を引く。 | 個人からグループへと活動の範囲を広げ、互いに確認しながら内容の理解の深化を図る。解答の根拠となる箇所を教科書で確認させるため、該当箇所に線を引かせる。 |

3 成果と課題

(1) 質問紙調査の分析

生徒の変容を測るために、取組前後に質問紙による調査を行った。本研究では、事後調査において、総論で述べた34質問項目と同時に、ペアワーク及びグループワークに関する6項目を追加し、調査を行った（表1）。各質問項目については、統計的処理を行うために、4件法を採用し、得点化を行った。それぞれの回答について、肯定的な回答から順に4点、3点、2点、1点まで、1点刻みで得点化した。高得点のものほど肯定的であることを示すようにした。分析には、IBM社のSPSS21を用いた。

取組を行う前に実施したプロジェクト共通34項目についての調査と取組後に実施した同項目の調査の平均値間に有意な差があるか、対応のあるt検定を行ったところ、どの項目とも有意な差は見られなかった。

表1 事後調査追加質問項目

| 番号 | 質問項目 | 平均値 |
|----|--|------|
| 35 | 1学期より2学期の方が、ワークシートが取り組みやすくなった。 | 3.17 |
| 36 | 1学期より2学期の方が、ペアワークに取り組みやすくなった。 | 3.32 |
| 37 | 一人で勉強するより、ペアワークの方が分かりやすい。 | 3.13 |
| 38 | ペアワークで「話し合う」「教え合う」ことができた。 | 3.30 |
| 39 | 4人グループで取り組んだReading for Communicationの課題は力が付いたと思う。 | 3.30 |
| 40 | 4人グループで取り組んだReading for Communicationの課題をクリア | 3.09 |

したとき、仲間と取り組むことに自信が付いた。

表2 ペアワーク、グループワークに関する6項目の相関係数

| | | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 |
|----|---------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 35 | Pearson の相関係数 | 1 | .308* | .251 | .280 | .390** | .292* |
| | 有意確率 (両側) | | .035 | .089 | .057 | .007 | .047 |
| | N | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 |
| 36 | Pearson の相関係数 | .308* | 1 | .562** | .635** | .443** | .583** |
| | 有意確率 (両側) | .035 | | .000 | .000 | .002 | .000 |
| | N | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 |
| 37 | Pearson の相関係数 | .251 | .562** | 1 | .571** | .372* | .522** |
| | 有意確率 (両側) | .089 | .000 | | .000 | .010 | .000 |
| | N | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 |
| 38 | Pearson の相関係数 | .280 | .635** | .571** | 1 | .226 | .620** |
| | 有意確率 (両側) | .057 | .000 | .000 | | .127 | .000 |
| | N | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 |
| 39 | Pearson の相関係数 | .390** | .443** | .372* | .226 | 1 | .441** |
| | 有意確率 (両側) | .007 | .002 | .010 | .127 | | .002 |
| | N | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 |
| 40 | Pearson の相関係数 | .292* | .583** | .522** | .620** | .441** | 1 |
| | 有意確率 (両側) | .047 | .000 | .000 | .000 | .002 | |
| | N | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 | 47 |

***p<.001, **p<.01, *p<.1

次に、ペアワーク及びグループワークに関する6項目について質問項目ごとに分析した。いずれの項目も、平均値は3.0以上であった。それぞれの項目間の相関分析を行い、ピアソンの積立相関係数を算出した(表2)。詳細を見ると、(36)「1学期よりも2学期の方が、ペアワークに取り組みやすかった。」は、質問項目(37)、(38)、(39)、(40)と、(37)「一人で勉強するより、ペアワークの方が分かりやすい」は、質問項目(36)、(38)、(40)と、(38)「ペアワークで『話し合う』『教え合う』ことができた」は、(36)、(37)、(40)と、(40)「4人グループで取り組んだReading for Communicationの課題をクリアしたとき、仲間と取り組むことに自信がついた」は、(36)、(37)、(38)、(39)と、それぞれ有意な正で中程度の相関関係が見られた。

(2) 考察

ア 質問紙調査より

質問項目(36)、(37)、(38)の3項目相互に中程度の相関が見られ、特に(36)と(38)に相対的に高い相関関係が見られたことは、1学期より2学期の方がペアでの音読練習に取り組みやすかったと肯定的に回答した生徒が、ペアを組んだ相手と互いに話し合い、教え合いながら、課題に対する理解を双方向に深め、自信をつけたことを示唆している。

また、(36)、(37)、(40)の3項目相互に相対的に高い相関関係が見られたことは、一人で行うよりもペアでの音読練習に取り組みやすかったと肯定的に回答した生徒にとって、音読練習を繰り返し行った後で取り組んだReading for Communicationの内容読解について、4人グループでの活動が有効であったことを示唆している。

さらに、(40)が(36)、(37)、(38)、(39)の4項目と相対的に高い相関関係が見られたことは、グループで学習することについての自信が、一人で勉強するよりも他者と学び合い、教え合いながら複数人で勉強することで課題をクリアすることの達成感と密接に関係していることを示している。

前述のように、ペアワーク及びグループワークに関する6項目の平均値は、いずれも3点以上の相対的に高い数値を示していることは、生徒は本研究での取組を肯定的にとらえていることを示唆している。ただし、ワークシートに関する質問項目である(35)「1学期よりも2学期の方が、ワークシートが取り組みやすくなった」については、平均値は相対的に高い数値を示したが、他の項目との中程度以上の相関は見られなかったことから、生徒はワークシートを肯定的にとらえているが、「協働的・双方向的な学び」によって得られた自信とは、大きな関連は見られないことを示している。

その後、プロジェクト研究1の共通項目中の「英語の勉強は好きだ」と、ペアワーク及びグループワークに関する6項目それぞれとの関係について追加の分析を行った。ピアソンの相関係数を算出したところ、中程度以上の相関は見られなかった。このことは、本研究における協働学習・双方向型学習は、英語が好きな生徒、嫌いな生徒等、特定の層だけに効果があるものではなく、どの層にも一定の効果があることを示している。本来、授業とは特定の生徒の学習意欲を上げるために組み立てるものではなく、どの層の生徒にも有効であるべきものであることから、本研究における授業モデル及びワークシートは、授業での活用に適していると言える。

イ 生徒観察より

本研究における生徒の英語学習に対する様子の変容を、観察の結果から考察する。

研究員は、当該学年の生徒を一年次から指導しているが、ペアワークやグループワークを導入する機会はこれまであまりなかった。この取組を通して、生徒が英語の学習に対して以前よりも前向きに取り組むようになり、楽しんで英語を発する様子が見てとれるようになったことは、大きな変化であると捉えている。例えば、ペアワークによる音読指導に取り組ませた際には、全く日本語を介さないわけではなかったが、教員主導の和訳の解説とは違い、自分たちで考えてジェスチャーを付け積極的に音読練習に取り組む様子が見られた。付けるジェスチャーの数を教員が指定することで、Dialogの内容をより深く考えなくてはならず、生徒たちには負荷のかかるタスクとなったようである。また、教員の前で暗唱する時に詰まってしまっても、ジェスチャーがヒントになって思い出す生徒もいて、ジェスチャーリーディングの効果が確認された。また、次の二人の生徒の変化にも着目したい。

これまで学習成績が全般的に低迷しており、英語学習に対しても意欲を示さなかった生徒Aは、第3回質問紙調査の「英語の勉強は好きだ」「英語の勉強は大切だ」の項目に対して前向きな回答をしており、その変容が見て取れる。Aは、第1回の質問紙調査の記述回答で、英語の勉強が好きでない理由として、「勉強が得意じゃないから」「外国人としゃべる機会が少ないから」と回答していたが、2学期になり、ペアワークやグループワークを進めると、当初はペアやグループの他のメンバーに付いていけず意欲を無くす場面が見られたものの、他のメンバーからの「明日ここまで覚えておいで。絶対やで！」等の根気強い励ましにより、最後には課題をクリアするに至った。Aは、12月の質問紙調査の記述回答では、英語の勉強に対する肯定的な回答の理由として、「自分で英語を言えるのはうれしい」「外国の方としゃべれるから」と記述している。以前は英語を口にするのを避けていたAが、仲間と一緒に英語を発することを楽しめるように変化したと言える。

また、第1回質問紙調査では、「英語の勉強は好きだ」「英語の勉強は大切だ」の項目に否定的な回答をしていた生徒Bは、取組以前は英語に対して強い苦手意識があり、質問に間違えることを恐れるあまり授業態度も消極的であったが、取組後の第3回質問紙調査では「授業でわから

ないことがあると、クラスの友達に聞くことができる」に対して肯定的な回答をしている。また、前述の二つの項目にも肯定的な回答をしており、その理由として、「英語はグループとかで協力できるから好きだ」「英語で話せるようになったら外国の人と話せるから大切だ」と記述回答している。2学期からのペア・グループワークに取り組むBの様子も、生き生きとした表情で、仲間と熱心に、また楽しそうに取り組んでいた。仲間に頼りきることなく、自分自身で考え、仲間と考えをシェアし、最後まで諦めることなくやり遂げようとする様子は以前には見られなかったものである。

上記のような生徒の変容から、本研究で取り組んだペアによる音読練習と、ワークシートを使ったグループによる読解ワークによる取組は奏功し、生徒の意欲的な学びを導いたのではないかと思われる。また、杉江(2011)がいう、「主体的で自律的な学びの構え、確かで幅広い知識習得、仲間と共に課題解決に向かうことのできる対人技能、さらには、他者を尊重する民主的な態度、といった『学力』を効果的に身につけていく」一助となり得たのではないかと考える。

(3) 今後の課題

グループ学習による英文内容読解を進める上でワークシートを用いたことで、主体的に意見を出し、互いに話し合い、教え合いながら課題に取り組む生徒の姿が見られるようになった。また、読解のポイントが明確になり、指導者側にとっても授業を展開しやすくなったことから、その有効性は指摘できる。今後、生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成のために、より使いやすく、より効果的なワークシートの工夫が望まれる。

また、ペアやグループにおいて他を牽引するリーダー^{けん}を育成する必要性も感じた。単に詳細な説明ができるだけでなく、班員の学習状況を把握した上でより効果的な指示や決定ができるリーダーシップを、教育活動全体の中で育てていきたいものである。

参考・引用文献

- (1) 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』
- (2) 文部科学省(2013)「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/__icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_0_1_1.pdf
- (3) 文部科学省(2014)「今後の英語教育の改善・充実方策について報告(概要)～グローバル化に対応した英語教育対策の5つの提言～」http://www.kyoi-ren.gr.jp/siryou/H26/261204/261204_siryou_02.pdf
- (4) 文部科学省「平成25年度公立中学校・中等教育学校(前期課程)における英語教育実施状況調査」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/0_9/03/1351570_05.pdf
- (5) 江利川春雄(2012)『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店
- (6) 杉江修司(2011)『協同学習入門 基本の理解と51の工夫』ナカニシヤ出版
- (7) 西林慶武・高椋勇一(2011)『授業が変わる!最強の英語ペアワーク&グループワーク25』明治図書
- (8) 山岡憲史(2014)平成26年度奈良教育研究所研修講座「言語活動を主体とした英語の授業づくり」講義資料
- (9) 安木真一(2010)『英語力がぐんぐん身につく!驚異の音読指導法54』明治図書
- (10) 北原延晃(2010)『英語授業の「幹」をつくる本上巻』ベネッセコーポレーション